会員便り

佐伯市と真珠湾攻撃

中林幸夫

（会員　香川県綾歌郡国分寺町）

佐伯史談第一八九号『戦争遺跡めぐり―佐伯市、旧海軍航空隊員の山口さん案内』を拝見して、参加できないことを残念に思いました。

佐伯市在住中は、自分ながら佐伯海軍航空隊のことが知りたくて、興人の敷地内及び掩体壕、海上自衛隊庁舎の一階―三階、屋上からの佐伯湾と見せてもらいましたが、昔の面影に続くものはありませんでした。

私が佐伯海軍航空隊になぜ興味をもっていたかというと、第二次大戦勃発時の真珠湾攻撃の基地であったということを聞いたからです。

真珠湾攻撃の発案は時の連合艦隊司令長官山本五十六であったからです。

それまでの海軍は巨艦巨砲の思想による海戦が主でしたが長官は今後は航空戦になることを予想し空母と航空機による訓練を実施させ、極秘裡に淵田美津雄、源田実中佐に真珠湾攻撃の説明をしたということです。

両航空参謀は、航空機の編成を

・戦闘機隊

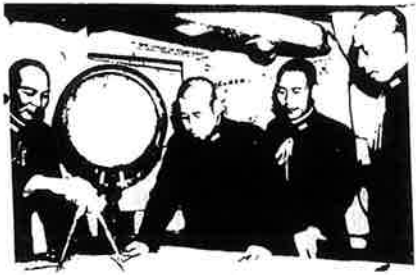
・雷撃隊

・水平爆撃隊
・急降下爆撃隊

として、

戦闘機隊は零式艦上戦闘機を使用するとして、佐伯で佐伯湾内の艦船を泊地爆撃、雷撃訓練、艦上攻撃隊は九九式艦上攻撃機として、大分県の富高・宮崎県の笠の原で、艦上爆撃隊は九九式艦上爆撃機として鹿児島と出水市で桜島をハワイにみたてて訓練したようである。

真珠湾内は海底の水深が浅いので魚雷が海底にあたり爆発しないためには低角度で発射しなければならず大変な訓練であったと言われている。



司令長官時代、連合艦隊旗艦「長門」の作戦室に
(左から宇垣参謀長、山本、藤井政務参謀、渡辺戦務参謀

開戦を予測して長官は昭和十六年十一月十三日(二十三日?)岩国航空隊に各艦隊の司令を、召集最後の打合せを行なっている。

作戦は、山本長官の命を受けた第十一航空艦隊参謀長の大西滝治郎、第一航空艦隊参謀長草鹿龍之介、第一航空艦隊航空甲参謀の源田実らによって練られたという。出撃艦隊の総指揮官は南雲忠一、旗艦は赤城。

佐伯で訓練を受けていた隊員は、十一月十日に全員二日間の休暇が与えられ故郷に帰り、十六日、母艦に収容されて佐伯湾を出港、択捉島の単冠湾に向かった。開戦と真珠湾攻撃を一般隊員は知らされておらず、寒冷荒天の中をもくもくと航海したようである。航空隊員のみが内容を知らされていて猛訓練をしたようであるが、真実はわからない。

真珠湾攻撃は大勝利に終わっているが、当日出撃した航空機のうち、

・零戦　九機
・艦攻　五機

・艦爆　十五機

が未帰艦である。

戦闘機隊は空母、蒼龍に積載されていたようで戦闘機隊長、飯田房大大尉、藤田怡与蔵中尉らに先導され発進している。

勝利の発表は大々的にされたが、散っていた未帰艦機についてはあまり発表されていない。

連合艦隊は真珠湾では勝利をおさめたが、その後の海戦では壊滅的な敗北を喫した。その原因は、米軍のレーダー、及び日本軍の暗号が解読されていたからである。

話は変わるが、昭和三二年八月、第七管区海上保安本部(門司)の本部長が突然交代して、第一管区海上保安本部長(北海道)から、渡辺安次氏が着任した。

ちょうどそのころ日韓会談の交渉中で、韓国は交渉を優位に運ぼうとして李承晩ラインなるものを勝手に主張、それを侵犯した日本漁船をかたっぱしから拿捕して自国に連行、人質としていた。拿捕された漁船は約三百隻以上、漁船員は四千人以上となり、釜山の収容所は満ぱいで、日本漁船員が待遇改善を求めてデモをするほどになっていた。

渡辺本部長は着任早々、私を呼んで「君は韓国の暗号を解読していると言うが、本当かね」と尋ね、説明を求めた。大戦中、日本海軍がアメリカの暗号を解読しようとして優秀な人材を集め努力したが解読はできなかったのに、韓国の暗号が解読できたことに不信を抱いており、説明に納得はしたが、「君らの作業状況を見たい」と言って、私たちの部屋へ大きな本部長専用の椅子を持ちこみ、韓国警備艇の傍受電報を解読するのを見守った。我々は乱数使用の暗号ではあったが傍受電報の約八十パーセントを解読していた。

本部長は毎朝、首脳部を集めて作戦会議を開き、警備艇の進行方向に対して警戒警報を発令、その海域内の漁

自分が考案した李ライン警報板の中に立つ、渡辺本部長

船に対し海域を離脱するよう命じ、巡視船を投入して拿捕を完全になくするよう指導した。

本部長は自ら巡視船に搭乗して海域の視察をしたり、大臣、海上保安庁長官らを搭乗して現場海域を視察するようになった。水産業界や漁船員から喜ばれたのは言うまでもない。本部長の話を直接聞きたい水産基地では拿捕防止会議を開き、本部長を歓待した。

ある日、本部長は来室して私に「何か、要望はないかね。」と聞いた。若い私は「本部長ばかり招待されていいかもしれないが、命がけで暗号解読に取り組んでいる私たちも、時きには連れていって欲しい。」と言ったら、「わかった。」と言って怒るようにして席を立ち、帰って行った。

本部長に随行していた部長と課長は青い顔をして、「君は何ということを言うのだ、世が世であれば君は本部長に話ができる身分でないのだ。」と叱られ、本部長の身分について元潜水艦の機関長をしていたという課長が語った。

本部長は連合艦隊司令長官山本五十六の直属の戦務参謀で、真珠湾出撃の時も航海中作戦の話をする以外は碁をさしていた仲で、長官に一番可愛がられていたので、長官の戦死による国葬が実施された時も長官の軍刀を持って先導役を務めたとか。しかし、私はそんな高官がなぜ戦犯にならなかったのかと不思議に思えた。

翌朝、私に本部長室へ来るように電話があった。

私が恐る恐るノックして中に入ると笑顔で、「まぁ、そこに座れ。」と自分の前のソファーに座らせてから、「昨晩いろいろ考えたら暗号解読の苦労がわかった。君が言うように君を会議に連れていき宴会にも出させてやりたいが君はまだ若い、俺は兵学校、海軍大学で社会学、社交術を勉強し、また駐在武官として礼儀の勉強もしてきたが、君は勉強していない。」と話しながら本棚の下の開きから洋酒を二本取り出し私の前に置き、ビールのチケット六枚をくれ、「そのうちに考えるから、今はこれで辛抱してくれ。」とほほえみ、「暗号解読をたのむな。」と言われた。

怒られるものとばかり思っていた私は、感激して涙声でお礼を言って帰ってきた。帰ってきて部屋に入ると、

課長はじめみんなが心配そうに「どうだった。」と聞いた。私は課長のテーブルの上に洋酒を並べ、事の次第を話すと課長も感激して「部長が心配しているから報告してくる。」と言って部屋を飛び出していった。

当日、退庁後から課長がオードブルなどを準備して、本部長・部長を招待し、ささやかな宴会が開かれた。みんなが軍人本部長の粋なはからいに感激したのはいうまでもない。

その後、私は本部長の過去の記録などを調べると、司令長官と並んだ写真や、昭和十六年十一月二十三日に岩国航空隊に各隊の司令官が召集された最終作戦会議後に撮影された『X日直前、提督たちの表情』四一名の中にも顔をのぞかせている。即ち提督なのである。

日韓会談は十余年に及んだ会談で、韓国側は会談がこじれると人質をとるために拿捕攻勢にでた。あるとき、暗号を解読すると全警備艇に出動を命じ拿捕作戦を展開しようとしたとき、本部長は日本全国の大型巡視船を召集して対処、事無きを得たことがあった。

彼は第二次大戦で暗号解読による果しえなかった作戦を実施した。一般にあまり公表されていないが、韓国側は拿捕の度に漁船・巡視船に対し、何百発もの銃撃をくわえていた。中国漁船は武装していたため交戦となり、韓国警備艇が大破したり、巡視船も韓国済州島に乗り上げあわやということもあった。これは日韓の小さな戦争であったと思う。

知覧航空隊が特攻基地として資料を収集しているように、佐伯航空隊も真珠湾とのつながりのある資料を収集して、将来に残すことも歴史ではなかろうか。

終戦前、私は詫間海軍航空隊から約三キロのところに住んでいたが、B29の何十機という編隊が飛来したとき戦闘機が発進したが、B29が飛行する高度まで達せず残念に思ったことや、毎日のように飛来して低空射撃してくるロッキード・グラマンが見事な編隊攻撃をするのをただじっとして見ている日本軍が腹立たしかった。最初のうちは高射砲が応戦していたが、そのうちまったく火を吐かなくなり、不思議に思い砲台をのぞいたら、螺旋状の砲身の先が打ちすぎ熱で亀裂、象の鼻のように

なっていた。

敵も味方も戦闘機の訓練は大変だったようである。空襲のあと子どもは籠を持って薬きょうを拾いに行かされたが、籠はすぐにいっぱいになった。敵機は帰りには少しでも軽くするため、機関砲弾は未使用のまま帯状で廃られていたのである。佐伯でも同じようなことがあったのではないかと思ったりする。

掩体壕　つわものどもや　冬の星

平和ほどありがたいものはない。

轟峠

轟峠は、古来堅田から蒲江・名護屋・楠本方面に越す峠で、その呼び名のひびきが示すように、旅人がかなり苦労した峠であった。

青山側から歩いてこの峠を越すためには、三軒屋から谷川に沿った道をたどる。二キロ半ほど登ったところで舗装道路から別れ、谷を越した向う側の旧道に入る。つい二十年ほど前まで、みんなが歩いていた峠道が、今なお健在である。しかし山あざみやいたどりのたぐいがはびこり、いばらやつる草と共に道をふさいでいて、歩くのに苦労である。

一キロほど歩くと急に谷がせばまり、今までの広い道はつきて、そこから狭い急な上り坂となる。樹林の中を右に曲り左に折れ、これを繰り返しながら一〇〇メートルほど登ると、急にバスの通っているトンネル口である。しかし、峠越しの道はそれを右手に見たまま、さらにつづら折り急勾配の道をあえぎながら上る。すると道はなだらかになり、林のつきたところで視界がパッと開ける。そこが轟峠である。

昔はそこに茶店が一軒あり、猪串の老夫婦が住んでいて、峠越しの人々に茶菓を提供していた。茶店の跡ははっきりしていて、その庭先に植えていた大明竹が広くはびこっている。

視界いっぱい山また山、眼のとどく限り重なりあって広がり、蒲江の海はそのはるか先にけむっていて、定かに見えない。

まず左手、この峠に続く焼飯山が、四〇〇メートルほどのとがった頂上を、手をのばせばとどくほどの間近に見せている。旅人が、前に開いた焼飯(握り飯を焼いたもの)と見くらべて名付けたものであろうが、うがった山の名である。山肌一面、頂上近くまで植林されている。

この焼飯山の稜線は、高くうねうねと海に向かい、東は遠く入津湾口の仙崎山に続き、東南は遥か山頂近くにテレビ塔をもつ背平山である。

正面から右手にかけても山また山、大小幾つも並び重なって愛宕山へと続き、いったん海に没して屋形島であるが、猪串湾もはるかな深島も、いずれも目の前の山塊や続く山々にさえぎられ、心ひかれる入江や漁村の家並みを、眼の下に見ることが出来ないのは残念である。しかし天空海闊、すばらしい展望といえよう。

(『蒲江町史』)